
二人の独り言

僕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の独り言

【Nコード】

N6371Y

【作者名】

僕

【あらすじ】

学生である僕と彼女。

『いつか』と『いつも』、他愛のない話を繰り返す。

始まりではない第一話

「なあなあ、君よ。いったいぜんたい僕は何を考えていると思うかな？」

昨日も聞いた質問を、僕はわかつていながら繰り返した。なにぶん、暇だからだ。宿題、勉強、その他込み込み、それらを数えるならば暇で無いだろうが、そう言われたところでそれを数えることは無いだろう。

しかし、だからと言って暇が良い訳でもなく、ならばいつそのこと同じ事でも繰り返そうと決めたのだ。

「君はまったく本当に、簡単なことを聞くんだね？」

僕が君と呼んだ彼女は、当然のように答えてくれた。その返答も昨日と同じだったけれど、それでもやはり、考えている事を読むことが、『簡単なこと』と言われてしまうのは少々気にかかる。安く言えば『ム力ついた』というのだろうか、どうもそこまでもないような気がした。

「だったら当ててみて頂戴。言っておくけど、昨日と違うのは確かだぜ？」

昨日と同じ台詞を繰り返す。こうして思えば、おとついても同じ事を聞いたのだったか。

「昨日と違おうと、おとついと変わろうと、君は君だよ？同じ人。だったら答えは決まっているようなものだと思わない？」

につこり笑って指を振る。なんとも明るい表現だけれど、僕は彼女の本音を知っている。

「僕はそうは思わない。だって今日の僕は昨日より暇だ。それに昨日よりも一日多い。昨日の僕は昨日の僕でしかないんだよ？」

彼女の言い分に僕はすこぶる賛成だったけれど、だからと言って始まった話をかき消すほどに、無粋な神経はしていないつもりだった。それに、なんとなく、反論してみたい気分だ。

「あつそ。初めまして今日の君。さつそくだけど頼んでいいかな？昨日の君に伝えてほしい。今日の君は大嫌いだけど、昨日の君は好きだったって」

「僕は僕だよ？君。明日だろうと明後日だろうと。僕が僕である以上、それ以下にもそれ以外にもなれないんだから」

僕は反論するのを止めた。

嫌われない訳でも、好かれたくない訳でもなかったから、彼女の言い分に回帰することにした。

「前言撤回にしても、ちよつと早すぎるんじゃないのかな？」

少々呆れているようにも見えたけれど、いまさらの事であり、僕自身も期待しているところがあつたから挽回する気は起きなかった。

「悪い事じゃあないだろう？」

サラリとそう答えておいた。

「そうだね。無駄に頑固よりは断然いいね」

彼女もサラリと答えるのだった。

「まあいいや。脱線はここまでにして問題に答えようかな」

僕がそれ以上いう事が無くなったのを見越したように、彼女は無理やりと思えなくもない方法で話を戻した。僕も救われたけれど。

「どうだい？わかった？」

わかった？と聞いたけれど、確実にわかっているだろう。僕にはその自信があつた。根拠が無い訳でもなく、ある訳でもないが、前例は無視できない結果だからだ。

「簡単な事って言ったでしょ？」

僕の問いに、もう一度そう返す。そこまで簡単だとは思わないけれど、人から見ればそんなものなのかもしれない。

「『私の答えに関わらず、外れて言おう』だね」

「……………」

「どう？当たってるよね。前は前で似たようなものだったんだから」はつきり言つて、あたってる。この結果も機能やおとつと同じだ。

しかし、今日はどうにも暇だから、やはりいつも通りという訳には行かせたくは無い。

幸い、今回は『はつきり言って』あたっているのだから、言いようによっては外れにできる。

「うゝん残念。外れだよ」

「あれ？外した？おかしいなあ」

僕の返事には納得がいかないようだ。が、別に納得して貰おうとしている訳ではないので今は気にしない。

「『私の』じゃなくて、『君の』だよ。惜しかったね」

僕は時計を見る。問題終了。今回のお話は終わらなければならぬ。

「なるほど、そこだったんだ。ずるいよ君」

彼女もつられて時計を見る。

「それじゃあまたいつか」

彼女の言葉には答えず、そう言った。彼女が本気で無いことぐらいは分かる。だからいつも通りに終わらせることにした。

「それじゃあまたいつか」

同じ言葉で別れる。

いつかが『いつ』かなんてことはわかっていて、時間が平等である事も知っている僕たちは、いつも通りに別れたのだった。僕は椅子に座ったままで、彼女は立ちあがって近い遠くへ。

時間は平等。いつかも平等に訪れる。

続きではない第二話

「やあやあ君よ。今日もなにも考えてないみたいだね？」

いつものようにやって来た彼女はいつものごとく登場した。

「まあね。考えてない事もないんだけど、そう言われれば考えてないのと同じことかな」

彼女の推測は酷く正しく正確だ。的確というわけではないが…。

「本当に君は暇潰しにしかないほどにつまらないね」

なかなか酷い言い様だけど、間違いではない。それは確かだ。

「いいじゃん。結構上等じゃあないかな？」

率直な感想を言うことにした。他の人ならいざ知らず、相手は他でもない彼女のなのだから。正しいと思ったのだから認めよう。

「まあね」

予想通りであるけど、少し期待とは外れた返答。

彼女と僕は結構似ていて、同じように暇なのだ。だから僕たちは暇潰しに成ってくれるものが、何よりもありがたい。

「それで、今日は何か御用？」

とりあえず僕は聞いてみた。返答の予想はついているけれど、恒例行事というか、言うべき定文だと思ったから。

「君が解っている通り、用がないから来たんだよね」と予想通りの解答。

「それは良かった。用があつたら絶対来ないよね」

用があつたなら、彼女にとっては良いことだろうけど、そうすると僕の暇が置き去りにされてしまうので、僕にとっては悪いことだ。

「もちろん。当然であたりまえだよ。絶対にね」

「だろうね。知ってる……というよりは、当たりはついてたよ」

どうも今日は冴えている。以心伝心とは言わないが、疑心暗鬼程度には推測がうまく当たる。

「なに？今日はわかりきったことを聞く日にするの？」

「よくわかったね。そうだよ。そうしようかなあ。と考えると
こなんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6371y/>

二人の独り言

2011年11月30日01時49分発行